白花の朝顔

泉鏡花作

一

「あんた、居やはりますか。」

「……唄にもあるーーおもしろいのは二十を越えて、二十二のころ三のころーーあいにく此の篇の著者に、經驗が、いや端的に體驗といはう、……體驗がないから、そのおもしろいのは、女か、男か。勿論誰に聞かしても、この唄は、女性の心氣に相違ないらしいが、ぞんなのを對手にし人情のあらはし方だか、男勝手には一寸きめ憎い。たゞし何う割引をした處で、二十二三は女盛り……近ごろでは一層娘盛りといつて可い。然も著者なかま、私の友だち、境辻三によつて話された、この年ごろの女といふのは、祇園の名妓ださうである。

名妓？　いかなるものぞ、と問はれると、淺學不通、その上に、然るいべき御祝儀を並べたことのな

い私には、新橋、柳橋……いづくにも、これといつて容式をお目に掛ける知己がない。遠いが花の香と諺にもいふ、東京の山の手で、祇園の面膨を寫すのであるからい名妓は、名妓として、差支へないであらう。

また、何かゆゑに、淺學不通まで打ちまけて、こんな前書をするかといへば、實はその京言葉である。すなはち、讀みはじめに記した「あんた、ゐやはりますか。」ーー は、どう聞いても、紙園の藝妓、二十二、三の、すらりと婀娜な別嬪のやうぢやあない。おのぼりさんが出會した旅宿萬年屋でござる。女中か、精々ーー いまはあるか、何うか知らぬ、二軒茶屋で豆府を切る姉さんぐらゐにしか聞えない。嫋音、嬌聲、眞ならず。境辻三……巡禮が途に惑つたやうな名の男の口から、直接に聞いた時でさへ、例の鶯の初音などとは沙汰の限りであるから、私が眞似ると木蒐に化ける。第一「あんた、居やはりますか。」 さて、思ふに、「あの、居なはるか。」

とおとづれたのだか、それさへ的確ではないのださうであるから、構はず、關東の地聲でもつて遣つける。

谷の戸ではない、格子戸を開けたときの、前記の聲が「こんちは、あの……居らつしやいますか。」と、雜とかはるのであることを、諸賢に御領承を願つて置いて……

辻三が此の聲を聞いたのは、麹町ーー番町も土手下り、濕けた崖下の窪地の寒々〳〵とした處であつた。三月のはじめ、永い日も、午から雨もよひの、曇り空で、長屋建の平屋には、しかも夕暮が軒に近い。窓下の襖際で膳の上の銚子もなしにーー もう時節で、鹽のふいた鮭の切身を、鱧の肌の白さにはかなみつゝ、辻三が……

といふものは、ついその三四日以前まで、ふとした事から、天狗に攫はれた小坊主同然、しかし丈高く、面赤き山伏といふ處を、色白にして眉の優い、役者の或女形に誘はれて、京へ飛んだ。初のぼりだ

のに、宇治も瀬田も聞いたばかり。三十三間堂、金閣寺、兩本願寺の屋根も見ず知らず、五條、三條も分らずに、凡そ六日ばかりの間といふもの、鴨川の花の廓に、酒の名も、菊、櫻。白鶴、富久娘の膏を湛へた、友染の袖の池に、錦の帶の八橋を、轉げた上で泳ぐが如き、大それた溺れよう。肝魂も泥龜が、眞鯉緋鯉と雑魚寝とを知つて、京女の肌を視て歸つて、ぼんやりとして、まだその夢の覺めない折から。

……

無理もない、冷飯に添へた鹽鮭をはかなむのは。

……　時に、膳の上に、もう一品、惣菜の豆の煮た奴。

……　女難にだけは安心な男にも、不思議に女房は實意があるから、これは其處らの、あやし氣な煮豆屋が、あんぺらの煮出しを使つた惡甘いのではない。砂糖を奢つて、とろりと煮込んで、せつせと煽いで、つやみを見せた深切な處を、醉覺の舌の尖に甘く染まして、壁にうつる影法師も冷たさうに縮んだ處へ。

ころ／＼と格子が開いた。取次の女中へ何かいふ、

淺間(あさま)な住居(すまひ)で、手(て)に取(と)るやうな、その　「あんたはん、居(ゐ)やはりますか。」　譯(やく)して、　「こんちは、あの、居(ゐ)らつしやいますか。」　のそれだつたのださうである。

二

「京の祇園と、番町の土手下ーー　いや、もう些と　ーー　半道ばかり近いのです。大勢の中で、其の藝妓　ーー　お絹といふんです　ーー　其の女が、京都驛まで、九時何十分かの急行を、見送りに來てくれたんだから。　・・・・・　それにしても少々〳〵遠過ぎますね。　ーー　聲を聞いて、すぐそのお絹だ、と思つたのは。

しかし事實なんです。

（やあ、これは珍客。）

とか、大きな聲して、いきなり、箸をおくと、件の煮豆を一つ、膳の上へ轉がしながら、いきなり立上つて中縁のやうな板敷へ出ましたから。　・・・・・　鵯が南天燭の實、山雀が胡桃ですか、一層鶯が梅の蕾をこぼしたのなら知らない事　ーー　草稿持込で食つて居る人間が煮豆を轉がす樣子では、色戀の沙汰ではありません。　ーー　それだのに・・・・」

境辻三は，串戲ではなささうに、眞顏になつてい

つたのであるーー

「しかし、又あらためて、お絹のその麗しさといふものは。　……　（お危うございます、こゝは暗いんでございますから。）　おいそれものの女中めが、のつけのその京言葉と、朱鷺色の手絡、艶々〳〵した圓髷、藤紫に薄鼠のかゝつた小袖の褄へ、青柳をしつとりと、色の蝶が緑を透いて、拔けて、ひら〳〵と胸へ肩へ、舞立つたやうな飛模様を、すらりと着こなした、長襦袢は緋に總染の小櫻で、ちら〳〵と土間へ來た容子を一目、京都から歸つたばかりの主人が旅さきの知己、的切落けるものと合點して、有無を部屋へ聞かないさきから、すぐかうお通りはいゝのですが、口上が癪ですよ。　（眞暗ですから。）　が、仕方がない、押付け仕事の安普請で、間取りに無理がありますから、玄關の次が暗いのです。いきなり手を曳いて連れ込んだ、そのひき方がそゝつかし屋で荒いので、私と齷を會はせた時は、よろけ加減で、お絹の顔が、ほんのりとなつて、その長篠袢のしなやかな裳をこぼれた姿は、脊は高し、天井の黒い雲から絲櫻がすら〳〵と枝垂れたやうで、いや、どうも　……　祇園の空から降つて來たか

と思はれました。

一　時に、重ねていふやうですが、三月のはじめです。三月といへば彌生です。櫻は季節でありますけれども、まだ何處にも咲いては居ません。處が、どうした事か、これから、宵、夜、夜中に掛けて、話を運びます、春木町の、其の頃の本郷座。上野の山内、清水の觀音堂。鷺谷といふ順に、その到る處、花が咲いて居たやうに思ひます。唯今も、目に見えて、櫻に包まれるやうですが、實は、こんな事は、今まで、誰にも片端も饒舌つたことはありませんから、いつも一人で、咲満ちた花の中にゐた氣だつたのですけれども、あなたに。」

著者に、いふのである。

「三月、と口にしますと同時に、ふと氣がつくと、彼岸ずつと前で、まだ櫻は咲きません。が、それからお絹を連れて行きました、本郷座の芝居が、丁ど祇園の夜櫻、舞臺一面の處へぶつかりましたし、續いて上野でも、鶯谷でも、特に觀世音の御堂では、この妓と、花片が颯と微醉の頬に當るやうに、淡い

薫さへして、近々と、膝を突合はせたやうな事がありましたから、色の刺激で、欄干近い、枝も梢も、ほの紅かつたのだらうと思はれます。

處で　ー　芝居行です。が、どの道、絲錦の帶で押立よく、羽織はなしに居ずまひも端正としたのを、仕事場の机のわきへ据ゑた處で、　・・・・　おなじ年ごろの家内が、糠味噌いぢりの、襷をはづして、澁茶を振舞つて見た處で、近所の鮨を取つた處で、てんぷら蕎麥にした處で、ぴん長鮪の魚軒如きで一銚子といつた處で、京から降つて來た別嬪の攝待らしくはありません。京では、瓢亭だの、西石垣のちもとだのと、この妓が案内をしてくれたのに對しても、山谷、濱町、然るべき料理屋へ、晩のご飯といふ懷中はその時分なし、今もなし、は、は、は、笑つたつて、ごまかせない。

（おつれは？）

たゞ一人で訪ねて來て、目の前に斜に坐つてゐる極彩色に、連を聞いたも變ですが、が稼業ですから。

・・・・・　なぞといつて、まじくなひなから、とつ

おいつのうち、お絹が、四五人で客に連れられて來たのだけれど、いまは旅館に一人で殘つた　……

（早う、あんたはんの許へ來たうて、來たうてな。）

いよ／＼、天麩羅では納まらない。思ひついたのが芝居です。

で、本郷に出てゐるのは、箕原路之助　ーー　この友だちが、つい前日まで、祇園で一所だつたので、四條の芝居を打上げた一座が、歸つて來て、彌生興行のひ下さい。

（……すぐ出掛けませう、御婦人には芝居と南瓜が何よりの御馳走だ。）

馬鹿も通越した、自棄な言句を切出して、

（ご贔屓の路之助が出てゐます。）

役者を贔屓とさへいつて置けば間違ひはないものの　ーー　その實、祇園にゐたうちに、五人、八人、時には十人にも餘つて、その六日ばかりの間、時々出入り交代はあつても、殆ど同じ顔の藝妓舞子が、

寝る、起きる、飲む、唄ふ。十一時ごろに芝居のはねるのを宵の口にして、あけ方の三時四時まで續くんでせう。雑魚寝の女護の島で、宿醉の海豹が恍惚と薄目を開けると、友染を着た鴎のやうな舞子が二三羽ひら／＼と舞込んで、眉を撫でる、鼻を掴む、花簪で頭髪を掻く、と、ふわりと胸へ乗つて、掻巻の天鵝絨の襟へ、笹色の唇を持つて行くのがある。

……・いゝえ、その道之助のですよ。女形の。

……　然も同じ衾の左右には、まくれたり、はだかつたり、白い肌が濡れた羽衣に包まれたやうに成つて、紅の閨の寝息が、すや／＼と、春風の小枕に小波を寄せてゐる。私はたゞ屏風の巖に、一介の榮螺の如く、孤影煢然として獨り蓋を堅くしてゐた。とに角です、晝夜とも、その連中に、未だ嘗て、顔を見せなかつたのが、お絹なんです。

ー　晩には、東京へ歸らうとする朝でした。旅馴れないので、何となく心が急きます。早めに起きた右の榮螺が、そつと蓋をあけて、恐る／＼朝日に映る寝亂れた浮世繪を覗きながら、二階を下りて、廊下を用たしに行く途中、一段高く、下へ冰は流れ

ませんが、植込の冷い中に、さら／＼と筧の音がして、橋づくりに渡りを架けた處があつた。

そこに、女中

：いや、中でも容色よしの仲居にも、つひぞ見掛けたことのないのが、むざふさな束髪で、襟脚がくつきり白い。大島絣に縞縮緬の羽織を着たのが、兩袖を胸に合せ、橋際の柱に凭れて、後姿で寂しさうに立つてゐる。横顔をちらりと視て通る時、東山の方から松風が吹込んだやうに思ひました。　ー

これが、お絹だつたのです。

あとで聞くと、病氣で休んでゐて、それまでの座敷へは出なかつた。髪を洗つたのも漸と昨日で、珍らしい東の客が、今日歸る、と聞いたので、急いで來たが、まだ皆夜中らしいから、遠慮をしてゐたのだといふのが分りました。けれども、顔を洗つて、戻るのに、まだおなじところに、おなじ姿を見ると、一寸二間ばかりの橋が、急にすら／＼と長く伸びて、宇治か、瀬田か、昔話の長橋の眞中に唯一人怪しい婦が、霞んに彳だやうですから、氣をはつきりと、

欄干を傳ふところを、

（目々、覺めてどすか。）

と清しい目で、一寸見迎へて、莞爾したではありませんか。私は冷りとしました。第一、目々が覺めたといふ柄ぢやない、洗つて來い、といふ面です。

閑靜だから、此方へ　ーー　といつて、然も待設けてでもゐたやうに、・・・疏水ですか、あの川が窓下をすぐに通る、離座敷へ案内をすると、蒲團を敷かせる。乘つたんですが、何だか手玉に取られた形で、腰が浮くと、矢の流れで危いくらゐ。が、きつぱりと目の覺めた處で、お手づから、朝茶を下さる。

（姉さんは、娘はんですか、此樓の・・・）

いやな野郎で、聞覺えの京言葉を、茶の子でなしに噛りましたが、娘か、と思つたほど、人がらが勝つてゐる。・・・

通力自在、膳も盃洗もすぐ出る處へ、路之助が、きちんと着換へて入つて來て、鍋のものも、名物の

生湯葉澤山に、例の水菜、はんぺんのあつさりした水煮で、人まぜもせず、お絹が　ーー　お酌。

（ずツと見物をおしやしたか。）

宇治は、嵯峨は。　ーー　いや、いや、南禪寺から將軍塚を山づたひに、兒ケ淵を拔けて、音羽山清水へ、お參りをしたばかりだ、といふと、まるで、御詠歌はんどすな、ほ、ほ、ほ、と笑ふ。

路之助が、

（その癖、お絹さん、お前さんの好きさうな處ばかりだぜ。　・・・　境さん　ーー　この人は、まだ休んでゐて隙ですから、其處いら、御案内をしようといふのですが、どうかすると、神社佛閣、同行二人の形に成りかねませんよ。

（巡禮結構。同行二人なら野宿でもかまひません。）

（ほ、ほ、ほ、よういはんわ。）

「御免下さい。・・・だから言はないことではない。もうこの邊の、語義の活法が覺束ない。

が、串戯ではありません、容色、風采この人に向つて、つい（巡禮結構）といつた下に、思はず胸のせまることがあつたのです。ーー

ですから、嵯峨へ、宇治へといふのを斷つて、朝出ると、すぐ三十三間堂。社まうで、寺まゐり。何にしろ食つたものさへ、水菜と湯葉です。あの、鍋からさら／＼と立つた湯氣も、如月の水を渡る朝風が誘つたので、霜が靡いたやうに見えた、精進腹、清淨なものでせう。北野のお宮。壬生の地藏。尊かつたり、寂しかつたり。途中は新地の赤い格子、青い暖簾、何處かの盛場の店飾も、活動寫眞の看板も、よくは見ません。菜畠に近い場末の辻の日溜りに、柳の下で、鮒を賣る桶を二人で覗いて、

（みんな、目あいてゐやはるな。）

といつた、お絹の目が鯉の目より濡々／＼としたのが記憶にある　……　といつた見物で。　ーー　歸途は、薄暮を、もみぢより、花より、たゞ落葉を鴨川へ渡したやうな　ーー　團栗橋　ーー　といふのを渡つて、もうゐ一度清水へ上つたのです。まだ電燈にはならない時分、廻廊の燈籠の白い達筆の聯な

つたやうな薄あかりで、舞臺に立つた、二人の影法師も霞んで高い。……

暗い磴の幽な底に、音羽の瀧の音を聞いた時は、

松風に音羽の瀧の清水を
むすぶ心やすゞしかるらん

地唄の三味線は、耳に消えて、御詠歌の聲をさながらに聞きますと　ーー　はてな、何故か今朝、起きぬけに、祇園の茶屋の橋がかりで筧の音のした時と、お絹の姿も同じやうで、一日を夢に見たやうに思ひましたかーー

ーー　更に、日もおかず、お絹か土手番町へ訪ねて來た、しかもその夜、上野の清水の御堂の舞臺に、おなじやうに、二人で立つ事になつたんですーー

音羽のその時は、風情がいゝから、もう一度、團栗橋を渡り返した、京洛中と東山にはさまつて、何だか、私どもは小さな人形同然、笹舟ぢやあない、

木の實のくりぬきに乘つて、流れついた氣がしまーー

然うですよ、宿は西石垣のなにがし屋に取つてあつたのですが、宿では驚いて居たでせう。路之助の馳走になりつゞけで、おのぼりの身は藻拔の鼓で、座敷に預けたのが、擬更紗の旗袋唯た一つ。

しはす、晦の雪の夜に、情の宿を參らせた、貧家の衾の筵の中に、旅僧が小判になつて居たのぢやない。魔法妖術をつかふか知らん、お客が蝦蟆に變じた形で、ひよこんと床間に乘つてゐる。

お絹が引添つての、心づけでは、電話で、もう路之助から、こゝの勘定は濟んでゐる。まだ、それよりも、お恥かしいやら、をかしいのは。……

（ーーお絹さん、その手提袋ですがね、中味が緊張してをりません、張合のないせゐか、紐が自から、だらりとして、下駄のさきとすれ／＼に袋が伸びてゐたさうで。京都へ着いた時迎ひに來てくれました、

路之助の番頭と一所だつた年増の藝妓が、追つて酒宴の時、意見をしてくれましたよ。あれは見つともない、先陣の源太はんやないけど、腹帶が弛んだやうに見える　・・・・　といつてね。）

（ほんに、私も、東の方贔屓どす・・・・しつかりとあんじようにに・・・・）

ーー　細い指であやつツて、あ、着換を疊まう、といふ、待遇振。ですが、何にもない。着のみ、着のまゝで、しやんと結ばると袋はぺしやんこ。其奴を袖で抱いて、さ、晩のご飯を近所のちもとへ、と立たれたのには、懷中もぺしやんこです。

これも路之助の心づけで、ちやんと席を取つて支度が出來てゐて、さしむかひで、酒になつた處へ、芝居から使の番頭、姓氏あり。津山彦兵衛と一寸お覺え下さい。

（　ーー　すぐ、あとで、本郷座の前茶屋へ顔を出しますから　ーー）

花柳界の總見で、樂屋は混雜の最中、おいでを願

っては却つて失禮。お送りをいたすはずですが、丁ど舞臺になりますから。　……　縞の羽織、前垂掛だが、折目正しい口上で、土産に京人形の綺麗な島田と、木蒐の茶羽の練もの　……　大贔屓の鳥で望んだのですが、この時は少々擽つたかつた。やがて、その京人形に、停車場まで送られて、木蒐が。……夜汽車で飛ぶ。」……

三

「入らつしやいまし、ようこそ。　ーー　路之助も一度お伺ひ申したいと、いひいひ、歸京早々稽古にかゝつて、すぐに、開けたものでございますから、つい失禮を。　……　今日はまた何うも難有う存じます。」

「御挨拶で恐縮ですよ。津山さん。私こそ、京都で、あんなにお世話になつて。　ーー　すぐにもお禮かた／＼お訪ね申さなければならなかつたのですが、ご存じの、貧乏稼ぎにかまけましてね。」

「なぞとおつしやる。……は、は、は。」

「と笑ひを手で蓋して、輕く咳した小肥りにがつしりした年配が、稼業で人をそらさない。

「眞個ですよ。ところでですね。ぷちまけた話ですが、萬事、些とでも、樂屋の方で御心配を下さらないやうに　ーー　實は賣場で切符を買つてと思ひましたがね。」

「そんな水臭いことを　……　ご串戲で。」

「いや、ご馳走は、ご馳走。見物は見物です。實は、この京人形」

お絹が上品な圓髷で、紫仕立の柳褄、茶屋の蒲團に、据ゑたやうにゐるのです。

「たしか、今度の二番目の外題も、京人形」

「序幕が開いた處でございまして、お土産興行、といつた心持でござんしてな。」

「そのお土産をね、津山さん、　・・・・　本箱の上へ飾つてある處へ　・・・・・　でせう。　・・・・・　不意でせう。まるで動いて出たやうでせう。並んでゐる木蒐にも、ふら／／と魂が入つたから、羽ばたいて飛出したと　ーー　お大盡づきあひは馴れてゐなさるだらうから、一つ、切符で見ようぢやありませんか、といふと、　・・・・・　嬉しい、といつて賛成は、まことに嬉しい。當方立處に懷中が大きく成つた。」

「は、は、は。」

と蓋して、輕く笑ふ。津山の懷中の方が餘程大きい。

「木戸へ差しかゝると滿員、全部曹切れ申侯だから、とに角、連中で來て、一二度知つてるので、此方に世話を掛けたんですが、つれがつれです、快よくあしらつてはくれましたけれども、何分にも、ぎつしりで、席は一つもないといふんで、止むを得ず……　惡く思はないで下さい　……　まつたく止むを得ず、茶屋から、樂屋へ聲を掛けて貰つたんですから。しかし、大入で、何より

結構。」

「お庇様で、こゝん處、ずつと賣切つてをります。いえ、お場所は出來ます。いえ、決して無埋はいたしません。そのかはり、他様と人込みで、ご不承を願ふかも知れません。今日の處は、ほんの場の景氣をお慰みだけ、芝居は更めてお見直しを願ひたうございますので。　……　つきましては、いづれ樂屋へもお供をいたしますが、そのおつれ様　……

その、京人形様。　ーー　は、は、は　ーー　の處は、何にもおつしやらず、ご内分に。　ーー　いえ、あなた様のおつれでございますから、仔細はないのでございますがな、此の役者なかまと申します

ものは、何かと其のつきあひが又　……煩いのでして、　……　京がら藝妓はんが道之助を追駈けて逢ひに來たわ、それ蕎麦だ　……　などと申すわけで、さうでもないのに、何かと物騒、は、は、は。」

兩三度、津山の笑ひは、こゝで笑ふのに豫め用意をしたらしいほど、式の如く、例の口許をおさへて、默然を暗示しながら、目でおどけた。

「……　は、は、は、と申すわけで。お含みを。ー　あゝ、八さん、お茶を入れかへて　……　然う、宜しい。何、ぼくにか、はて、忙しい。は、は、は。いやいづれ今ほど。　ー　お場所が出來ましたさうでございますから。」

膝で辷つて、津山が立つのと入交つて、男衆が階子段の口でお辭儀をして、

「では、ご見物を。」

「心得た。」

見ますとね、下の店前に、八角の大火鉢を、ぐるりと人間の巖の如く取卷いて、大髻の相撲連中九人

ばかり、峰を聳て、谷を展いて、湯呑で煽り、片口、丼、谷川の流れるやうに飲んでゐる。　……　何しろ取込んで忙しさうだ、早いに限ると、外套を脱いだ身輕です。いきなり下りると、

「へい、行つてらつしやいまし。」

帳場で女の聲がしたかしないに、

「危い！」

わツと響くのが一齊で、相撲が四五人どツと立つた。いづれも大ものですから、屋鳴り震動の中に、幽に、トンと心細い音が、と見ると、お絹のその姿が階子段の上から眞横になつて、くるくるトトトン、褄がばツと亂れて、白い脛、いや、祇園での踊手だと聞く、舞で鍛へた身は輕い、さそくの躾みで前褄を踏みぐくめた雪なす爪先が、死んだ蝶のやうに落ちかゝつて、帶の絲錦が藥玉に飜ると、溢れた襦袢の緋櫻の、細な鱗の如く流れるのが、さながら、凄艶な白蛇の化身の、血に剥がれてのた打つ状して、殆ど無意識に兩手を擴げた、私の袖へ、うつくしい首が仰向けになつて胸へ入り、櫛笄がきらりとして、前髪よりは、眉が芬と匂ふんです。そのまゝ私の首

筋に、袖口が熱くかゝつたなり、抱き据ゑて、腰をたてにしたまで、すべて、息を吐く隙がない。息を吐く隙がありません。

土俵が壊れたやうな、相撲の總立ちに、茶屋の表も幟を黒くした群衆でせう。雪は降りかゝつて、來ませんが、お七が櫓から倒に落ちたも同然、恐らく本郷はじまつて以來、前代未聞の珍事です。

あまりの事に、寂然とする、その人立の中を、どう替草履を引掛けたか覺えてゐません。夢中で、はすに木戸口へ突切りました。お絹は、それでも、帶も襟もくづさない。おくれ毛を、掛けたばかりで、櫛もきちんと插つてゐましたが、背負上げの結び目が、まだなま／＼と血のやうに片端垂つて、踏みしめて裾を庇つた上前の片褄が、ずる／＼と地を曳いてゐる。

抱いて通つたのか、絡れて飛んだのか、まるで現で、ぐたりと肩に凭つかゝつたまゝ、然うでせう……

引息を吻と深く、木戸口で、

「あゝ、お婿はん。」……

と泣くやうにいつた。生死の最中、洒落どころではないのですが、これは京都で、連中が、女形の客だといふので（お婿はん、お婿はん。）と私を、からかつたのが、つい出ました。

「……わて、もう、死ぬるか思うた。」

と、目が澄んで、熟と視て、颯と顔色が蒼ざめたんです。

「あんたはんに恥を掻かせた、濟まんなあ、……生命の親え。」

「……」

「二階を下りしなに、何や暗うなつて、ふら／＼と目がまうて、……まあ、私、ほんに、あの中へ落ちた事なら手足が斷れる。」

といふ聲も、小刻みで東へ廻る。茶屋の男は木戸口に待つてゐたが、この上極りを惡がらせまい用心で、見舞もいはない、知らん顔で……ぞろ／＼ついて來た表口の人だかりを、たツつけを穿いた男が二人、手を擧げて留めてゐるのが見えました。

そツと屈んで、

「へい、此方へ。」　ーー

土間、桟敷、二、三階、ぎつしり一杯。成程、漸と都合がついたのだと見えて、四人詰めに、上下大島づくめなのと、背廣の服のと、然るべき紳士が二人ゐましたが、此が、そのまゝ、腰に瓢箪でもつけてゐさうな、暖餘も、景氣燈も、お花見氣分、紅い靄が場内一面。舞臺は、切組、描割で引包んだ祇園の景色。で、この間、枝ぶりを見て返つたばかりの名木の車輪楼が、影の映るまで滿開です。をかしい事には、藝妓、舞妓、幇間まじり、きらびやかな取卷きで、洋服の紳士が、櫻を一枝　ーー　あれは、あの枝は折らせまい、形容でせう。　ーー　もう一人、富豪　ーー　成金らしい大島揃か、瓢箪をさげて居る。

一つ桟敷　ーー　東のずつと末でした　ーー　その妙に、同じやうな先客が、ふと氣がさしたと見えて　ーー　竢拶をした時は、ふり向きもしなかつたのが　ーー　お絹をこの時見返つて、愕然とした様

子です。　……

ところで、何でも、その櫻の枝と、瓢箪が、幇間の手に渡るのをきつかけに、おの／＼賑やかなすて臺辭で、しも手ですか、向つて右へ入ると、滿場唯祇園の櫻。

花咲かば告げ　むといひし山寺の　……

こゝの合方は、あらゆる淨瑠璃、勝手次第といふ處を、囃子に合はせて謠が聞える。

使は來たり馬＜　に鞍、鞍馬の山のうづ櫻　……

：

「牛若の假裝ででも出ますかね、私は大の贔屓です。」

恥づべし、恥づべし。　……　式亭三馬嘲る處の、聾桟敷のとんちきを顯はすと、

「路之助はんが、出やはるやろ。」

お絹の方が知つてゐる。たゞしこの樣子では、胸

も痛めず、怪我はしない。

しやり、り、揚幕。艶麗にあらはれた、大どよみの掛聲に路之助扮した處の京の藝妓が、襟裳のあかいがやゝ露呈なばかり、髪容着つけ萬端。無論友染の緋櫻縮緬。思ひなしか、顔のこしらへまで、ーー傍にならんだのとそつくりなのに、聾桟敷一驚を吃する處に、一度姿を消した舞妓が一人、小走りに驅け戻るのと、花道の、七三とかいふあたりで、ひつたり出會ふ。何でもお客が大變待あぐんで機嫌が惡い、急いで迎ひに、といふのです。

路之助の姉藝妓が、おゝしんど、か何かで、肩へ色氣を見せたのですが、

「えらう遲うなつて、ご苦勞え、あのな、つい其處で、いえ、あのな、むかうへ、　……　境はん。」

おや。

「あんたも知つてやろ。境はんが來やはつて、逢ひたう逢ひたうて居た處やろ、それやよつて。」

と此方を視て莞爾。　ーー

「いやゝ、驕んなはれ。」
と舞妓が入交つて、トンと揚幕の方から路之助の背筋を敲いた。

「おゝ、晴がまし。」お絹が、階子段を轉げた時から、片手に持つて居た、水のやうに薄色の藤紫の肩掛を、俯向いた頬へ當てたのです。

ーー　舞臺、舞臺ですか……

舞臺どころぢやありません。その時うしろの戸が、惡く、靜かに開いたと思ふと、この、私の背中を、トンと、誰か、ぐにやりとした手で敲いたんですから。

いま、戸が開いたと思ふと同時に、可厭な氣味合の冷アい風が、すうと廊下から入つて、ちり毛もとに、ぞツと沁みたも道理こそ、十九貫と渾名を取る……　豫て借金があつて、抜けつ潛りつ、すつぼかしてゐる　ーー　でぷ／／した、ある、その、安待合の女房が、餡子入の大廂髪で、その頃はやつ

た消炭色紋付の羽織の衣紋を抜いたのが、目のふちに、ちか／＼と青黒い筋の疊まるまで、むら兀のした濃い白粉、あぶら切つた面で、ヌイと覗込んで、

「大した勢ひでございますのね。」

「一寸・・・・出よう。」

・・・・ですもの、舞臺どころですか。ーー

「結構ですわ、ほんとに境さん、ご全盛で。」

「串戯だらう。」

「役者があなた、この大入に、花道で、名前の廣告をするんだもの。大したものでなくつてさ。」

と、くゝり頤を搖つて、しやくる。

「あれは洒落だよ、洒落も酒落だし、第一、この人數だ、境といふのは。」

賣店があるから、ずん／＼廊下を反れました。

「何も私一人といふんぢやあなからう。」

「うんえ、あの臺辭で、あなたの棧敷を見て笑つたのを見て、それで氣がついた、あなたの來てゐるのが。・・・・といつたわけなんですもの、やすい祝儀ぢやでけんでねえ。」

と、何處かのなまりが時々出る。

「馬鹿を言ひたまへ、路之助は友だちだぜ。　ーーおかみさん、知つてるぢやないか。」
「それは存じて居りますがね、ご全盛には違ひませんね。何しろ、しがない待合を、勘定で泣かせようといふ勢ひではありませんです。」
ないが上にもないものを、ありあまつてでもあるやうに。催促の術をうらがへしに、敵は搦手へ迫つて危い。

「一言もない。が、勢ひだの全盛なぞは、其方の誤解さ、お見違へだよ。」
「見違へましたよ、ほんとうに。」
と衣紋をたくして、
「大した腕だよ、見上げたあよう。」
「何が。」
「なにがぢやあないぢやないかね、といひたくなるよ。ふんとうに。　……　新橋柳橋それとも赤坂　……　ご同伴は。」
「……」
「一寸見掛けませんね、あのくらゐなのは。商賣がらお恥かしいんだけれど　……　三千歳

おいらんを素人づくりに……おつと。」
と兩袖を突張つて肩でおどけた。これが、さかり場の魔所のやうな、廂合から暗夜が覗いて、植込の影のさす姿見の前なんですが。

「藝妓にしたといふ素敵な玉だわ　……　あんなのが一人、里にゐれば、里の譽れ、まあさね、私のうちへ出入りをすれば、私の内の名聞ですのよ。……　境さん、貸借も、もとは味方、勘定は勘定、ものは相談、あなたとはお馴染ぢやありませんか。似合つたよ、恐れ入つたよ、ものになつてる、容子がね。うんねさ、だからさ、一度連込んでおいでなさいよ。早い話が　……　今夜、これから歸りにさ。水打つた格子さきへ、あの紫が裳をぼかして、すり硝子の燈に、頸あしをくつきりと浮かして、ごらんなさい、それだけで、私のうちの佑券がグツと上りまさね。

兜町の、ばり／／したのが三四人、今も見物で一所ですがね。すぐ切上げてもいゝんですの。一寸一座敷、拔け荷を賣りや　……　すぐに三十と五十さ、あなた。あなたの遊興は、うはになるわ。　も

う一息、目を眠つて、ーー直さん……」

（　ーー　直さんの意味詳ならず。談者、境氏に聞かんとして、いまだ果さざる處である　ーー　）

＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

「ね、色惡で、あの白々〳〵とした甘い膚を貸すとなりや、十倍だわ。三百、五百、借金もいて出るぢやあないかねえ。」

酒と、女か、目にも口にも借りのある、聾桟敷のとんちきも、むら〳〵として、我ながら姿見に色が動いた。

「何をいつてるんだ　ーー　同伴はないよ。」

「あら。」

「誰も居やしない。」

「まあ。」

「私一人ぢやあないか。」

「おや〳〵おや。」

「何を見たんだ。」
「ふん、しら／／しい、空ツとぼけもいゝ加減になさい。あなたがさういふ了簡なら、いゝから私は居催促をするから、こゝへ坐つ了ひますから、よござんすか。」

これこの十九貫、廊下へ、どすんと坐りかねない。
「仕方がない、ぢやあ、眞個の事をいはう。」
「いはないでさ。そして、一寸顔を貸しますか、それとも膚を　……」
「顔にも、膚にも　……　それは煙だ。」
「又かね、居催促ですよ、坐りますから。」
「あれは霞だ、霧なんだよ。」
「煙草のかねえ。」
「いや藝妓の　……　幽靈だ。」
「えゝ。」

「この大入に、けちでもつけるやうで可厭だから、いひたくはなかつたんだが、どうも然うまでいはれりや爲方がない。三千歳を素人とか、何とかいつたね、それだ、そつくりだ。そりや路之助に憑絡つて

る幽霊だ。いゝえ、憑ものは、當人の背中に負さつて居るとは限らない　ーー

實は祇園の藝妓だがね、私が此の間、彼地へ行つて居たもんだから、路之助が歸るのに先廻りをして、私を便つて來たらしい。又かと思ふ。　・・・・・　今いはれた時も慄然としてこの通り毛穴が立つてら。私には何にも見えないんだよ。見えないが、一人で茶屋へ休むと、茶二つ、旅籠屋では膳が二つ、といふのが、むかしからの津々浦々の仕來りでね、　ーー

席には洋服と、男ばかり三人きりさ。それが、お前さんに見えたのは、幽霊に違ひない。」

「ひえゝ。」

しめた。不斷の大臆病。

「行つて見たまへ、覗いてごらん、さあ。それが嘘なら、吃と彼處にゐやしない。ゐても、目には見えないから。」

「氣昧の惡い　・・・・・　いやだねえ。」

「板一枚のなかは、蒸し上るばかりのこの人數だ。幽霊だつて何うするものか。行つて覗いて見たまへ、

といふのに。」
恰も其處へ、魔の手が立樹を動かすやうに、のさ／＼と相撲の群が歸つて來た。
「それ、力士連が來た、なほ氣丈夫ぢやあないか。」
と、圖に乘つていつた。が、この巨大なる軀は、威すものにも陰氣を浴せた。それら天井を貫く影は、すつくと電燈を黒く蔽つて、廊下にむら／＼と影が並んで、姿見に、かさなり映つた。

「こゝへ來た、幽靈が。」
「ひやあ。」
「あ、力士の中に藝妓が居る。」
「きやツ、あれえ、お關取。助けてえ。」
「やあ、何ぢやい。」
縋りつかれた關取がたじろいで、
「どえらい頭ぢやい。棧俵法師い。」

「お絹さん　ーー　お絹さん。一寸。」
「戸を開けて、立ちながら密と呼ぶと、お絹は、金煙管に持添へた、女持ちの嵯峨錦の筒を襟下に挾

んで、すつと立つた。
前髪に顔を寄せ、
「何だか落着きません、一度、茶屋へ引揚げよう。」

四

その夜も　ー　やがて十一時　ー　清水の石段は、ほの白く、柳を縫つて、中空に高く仰がるゝ。御堂は薄墨の雪の中に、朱の柱を聯ね、丹の扉を合せ、青蓮の釘かくしを装つて、棟もろとも、雪の被衣に包まれた一座の寶塔のやうに淨く厳しく聳えて見ゆる。

「東口を上と、薄く手水鉢に明りのさしたのは、斜に光を放つた舞臺正面に唯一つ掲げた電燈で、樹にも土にも、靈境を照らす光明は此の一燈ばかりなのが、却つて佛燭の靈を表して、龍燈　……　といつては少し冥い。然矣、明星の天降つて、梁を輝かしつゝ、丹碧青藍相彩る、格子に、縁に、床に、高欄に、天井一部の荘厳を映すらしい。

見られよ、されば、全舞臺に、蟲一つ、塵も置かず、世の創の生物に似た鰐口も、その明星に影を重ねて、一顆の大碧玉を鏤めたやうなのが、棟裏に凝つて紫の色を籠め、扉に漲つて朧なる霞を描き、舞

臺に靉靆き、縁を廻つて、井欄に數ふる擬賓珠を、ほんのりと、さながら夜櫻の花の影に包んでゐる。

その霞より、なほ濃かに、靄に一面の胡粉を刷いて、墨と、朱と、藍と、紺青と、はた金色の幻を、露に研いて光を沈めた、幾面の、額の文字と、額の繪と、繪馬の數と、その中から拔き出たのではない、京人形と、木菟は、道芝の中から生れて出たやうに上つたが。ーー

「車夫、此處だ、此處でおろして。‥‥待つてて貰はう。」

俥を二臺、東の石段で下りたのです。

「逆縁ながら、といつては間違ひかね、手を曳いてあげようか。芝居茶屋の階子段のお手際では、此の石段は覺束ない。」

などと、木菟が生志氣にいふと、

「大事おへん、前刻落ちたら、それなり、地獄え。上が清水様どすよつて、今度は轉んだかて成佛どす。」　などと京人形が口を利いた。

手水鉢で、蔽の下を、柄杓を捜りながら、雫を拂ふと、さきへ手を淨めて、紅の口に啣へつゝ待つた、手巾の眞中をお絹が貸す・・・・

勝手になさい。

が、こんなのが、初夜過ぎた靈場へ、すら／／と參られようはずはない、東の階の上には、一本ならべの輕い戸だが、柵のやうに閉ざしてあつた。

「前は、かうではなかつたはずです　・・・・・　不良でも入るか知らん。」

「此方も不良どすな、おほ、ほ。」

「怪しからん、ーー　向う側へ。」

と、あとへ退つて、南面に、不忍の池を眞向ひに、高欄の縁下に添つて通ると、欄干の高さに、お堂の光明が遠くなり、樹の根、岩角と思ふまで、足許が辿々／／しい。

さ、さ、とお絹の褄捌きが床を拔ける冷たい夜風に聞えるまで、闃然として、袖に褄に散る人膚の花の香に、穴のやうな眞暗闇から、いかめの鬼が出は

しまいか　ーー　私は胸を緊めたのです。

「まづ、可。」

西側の、こゝの階段上は、戸はあるが、片とざしで開いてゐた。

廻廊の上を見れば、雪空でもあるやうに、夜目に、額と額とほの暗く續いた中に、一處、雪を開いて、千手救世音の金色の文字が髣髴として、二十六夜の月光の如く拝される。・・・

欄干に枝をのべて、名樹の櫻があるのです。　その梢、この額と相對して、たとへば雪と花の縁を、右へ取り、舞臺の正面その明星と、大碧玉の照る處、京人形と木菟が、玩弄品の轉つたやうになつて拝んだあとで、床の霞に褄を輕く、衝と出て、裏紫の欄干に、すらりと立つた、お絹の姿は　ーー＃＃＃＃＃＃＃＃＃2

この時、幹の黒い松の葉も、薄靄に睫毛を描いた風情して、遠目の森、近い樹立、枝も葉も、櫻のほかは、皆柳に見えた。

「あゝ、綺麗だ。お絹さん　ーー　向ひ合つた不忍の御堂から、天女が吃と覗いておいでだ。」

「おゝ晴がまし、勿體ないえ。」

と、吃驚したやうに、半ばその美しさを思つてゐて、羞ぢたやうに、舞臺を小走りに西口の縁へ遁げた。遁げつゝ薄紫の肩掛で、髷も鬢も蔽ひながら、曲る突當りの、欄干の交又する擬寶珠に立つ。

踊の錬で、身のこなしがはずんだらしい、その行く時、一筋の風がひら／＼と裾を卷いて、板敷を花片の輕い渦が舞つて通つた。

袖摺れるほどなれば、櫻の枝も、墨繪のなかに蕾を含んで薄紅い。

「そこから見えますせ、秋色櫻」

「暗うて、よう見えへんけど・・・先度畫來てをそはつた事があるよつて、何うやらな、底の方の水もせん／＼と聞えるのえ。」

「音羽の瀧が響くんでせうが、秋色は見えないは

ずだ。そこに立つて居るんだから。」

「またなぶらはる　……　發句も知らん、地唄の秋色はんて、どないしよ。」

と、振返ると、顔をかくしたまゝの羅の紫を、眉が透き、鼻筋が白く通つて、優睨みで凛とした。

花咲かば告げむと　いひし山寺の
使は來たり、馬に　鞍
くらまの山のうず　櫻……

ふと、前刻の花道を思ひ出して、何處で覺えたか、魔除けの呪のやうに、故と素よみの口の裡で、一歩、二歩、擬寶珠へ寄つた處は、あひては何うやら鞍馬の山の御曹子。　……　それよりも楠氏の姫が、田舍武士をなぶるらしい。　ーー　大森彦七

ーー　傍へ寄ると、　ーー　便なういかゞや　ーー

と莞爾して、直ぐふわりと肩にかゝりさうで、不氣味な中にも背がほてつた。

「やあ、洒落れてるなあ。」

ーー　そのころは、上野の山で、夜中まだ取締りはなかつたらしい。それでも、板屋漏る燈のやうに、細く灯して、薄く白い煙を靡かした、おでんの屋臺に、車夫が二人、丸太を突込んだやうに、眞黒に入つて居たので。

「羨しいやうですね……串戲ぢやない、道理こそ。　ーー　來てごらんなさい、此方の、西側へ俥を廻はしたのが、石段下に、變に遙な谷底で、熊が寢て居るやうですから。」

「動物園かてあるいふよつて、密と出て來やはりしめえんか、おそろしな。」

と、欄干ぞひに、姫ぎみ、お寄りなされたが、さして可恐くはなささうで。

「ほんに、谷底のやうで靄が深うおすな、前刻の階子段思出したら、目がくら／／とするやうえ。」

白い片掌を田舍武士の背にあてて、

「あの俥がひとりでに、石段を、くる／／まひまうて上つて來たら、どないしよ、……火の車になつておそろしかろな。」

「お絹さん、そんなことをいふもんぢやあない。歸途に怪我でもあると不可い。」

「それでも、あの段、くる／＼舞うてころげた時は、あて、ばツと帶紐とけて、裸身で落ちるやうにあつて、土間は血の池、おにが澤山ゐやはつて、大火鉢に火が燃えた。」

手を觸れてゐて、肌をいふ。大森彦七は胸が唸つた。魔を退けうと太刀の柄・・・・・洋杖をカンとついて、

「そんなことをいふから、それ、宙に火が燃えて來た、迎ひに來た、それ。」

「あゝれ。」

闇を縫つて、くる／＼と卷いて來る、火の一點あり。事實、空間に大きく燃えたが、雨落に近づいたのは、卷莨で、半被股引眞黒な車夫が、鼻息を荒く、おでんの盛込を一皿、銚子を二本に硝子盃を添へた、赤塗の兀盆を突上げ加減に欄干越。兩手で差上げたから卷莨を口に預けたので、煙が鼻に沁む顰

め面で、ニヤリと笑つて、

「へい、わざツとお初穂　　・・・・・　若奥様。」

「馬鹿な。」

「一寸、手をお貸しなすつて。」

「馬鹿な、お初穂もないもんだ。いゝ加減おみつてるぢやないか。」

「へゝゝ、煮加減の宜い處と、お爛をみて、取のけて置きましたんで、へい、たしかに、其の清らかな。」

「馬鹿な、おなじ人間だぜ、くひものは、つツくるみだ。そんな事はかまはないが、大丈夫かい、あとで、俥は？」

「自動車の運轉手とは違ひます、えへゝ。駕籠舁と、車夫は、建場で飲むのは仕來りでさ。ご心配なさらねえで、ご緩り。若奥様に、多分にお心付を頂きました。ご冥加でして、へい、何うぞ、お初穂を・・・・・」　お絹が柔順に、もの軟に取上げた、おでんの盆を、何ういふものか、もう一度彦七が故とやけに引取つて、「飛んだお供物、狒々にしやがる。

若奥様は聞いただけでも、禿祠で犠牲を取つたやうだ。　・・・・・　黒門洞擂鉢大夜又とでもいふかなあ。」

縁に差置いた湯氣の立つおでんの盆は、地圖に表示した温泉の形がある。

椎の葉にもる風流は解しても、鰯のぬたでないばかり、此の雲助の懐石には、恐れて遁げさうな姫ぎみが、何と、おでんの湯氣に向つて、中腰に膝を寄せた。寄せた其の片褄が、ずるりと前下りに、前刻のまゝで、小袖幕の綻びから一重櫻が　ー　芝居の花道の路之助のは、たゞこれよりも緋が燃えた

ー　誘ふ風にこぼるゝ風情。＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃

＃＃4

ー　實は帶を解いて、結び直す間かなかつた、茶屋が立籠んだからなので。　ー　あれから、直ぐに其の茶屋へ引上げて、吸物一つ、膳の上へ、辨當で一銚子並べたが、その座敷も、總見の控處で、持もの、預けもの澤山に、かた／＼男女の出入が續いたゆゑ、雑と夕銅を。　・・・・・　銚子だけは手酌でかへた。今夜は一先づ引上げよう、乗ものを、と思ふ處へ、番頭津山が急いで出て、もうお俥は申し

つけました　……　といふ、客あつかひに馴れたもの。急所を壓へて此方からは乘出させぬ。ご都合まで、ご存分な處まで、は、は、は、と口を壓へて笑ふと、お絹が根岸の藍川館　ーー　鶯谷へ、とこの人の口でいふと、町が嬉しがつて、ほう、と微笑んで鳴きさうに聞えた。寂しい處でごぎいますな、境さん　ーー　これはお送り下さらないではなりますまい。　……　勿論。

京では北野へ案内のゆかりがある。切通しを通るまへに、湯島　……　その鳥居をと思つたが、縁日のほかの神詣、初夜すぎては如何と聞く。　……　壬生の地藏に封するものは、此の道順に一寸ない。　其處で、何處よりも清水だつたが、待つた、待つた。廣小路の數萬の電燈、靄の海の不知火を掻分けるやうに、前の俥を黒門前で呼留めて　「上野を拔けると寂しいんですがね、特に鶯谷へ拔ける坂のあたり、博物館の裏手なぞは。」

「寂しいとこ行きたい、誰も居やはらんとこ大好きどす。」　すかし幌の裡から、白木蓮のやうな横顔なのです。

「大事ないどすやろえ、お縁の　……　裏の處

には、蜜柑の皮やら、南京豆の袋やら、掃き寄せてあつたよつてにな。」

「成程、舞臺傍の常茶店では、晝間はたしか、うで玉子なぞも賣るやうです。お定りの菎蒻に、雁もどき、燒豆府と、竹輪などは、玉子より精進の部に入ります。　……　第一これで安心して、燒草が吹かせる。灰もマッチ殼も、盆へ落すと。　……

よくない奴だ　。ーー　これは何うもお酌は恐縮重ねては、なほ恐縮、よくない奴だ。」

「巻莨と硝子盃を兩手に、二口、三口重ねると、壓へた芝居茶屋の醉を、ぱつと誘つた。

「さあ、お酌を　ーー　是非一口、かういふことは年代記ものです。」　お絹も、心ばかり、ビイドロの底を、琥珀のやうに含んで、吻と呼吸したが、

「あゝ、おいし……茶屋ではな、ご飯かて、針を呑むやうどしたえ。ほんに、今でも、ひざのとこ、ぷる／＼と震へるわ、菎蒻はんのやうどすな。」

もう一口。

「あの、これから場所へいうて、二階の上り口へ出ましたやろ。下に大きな人大勢やよつて、一寸立留まつて覗くやうにするとな、あゝ、灯が點れかけ

の暗さが來て、逢魔が時や思うたらな、路之助はんの幟が澤山、しんなり揃うた青い中から、大き大き顔が出てな。」

「相撲のだね。」

「違ひます、女子はんの。」

「……」

「口をばこないにして。」

と結んだ唇を、おくれ毛が凄く切つた、黒い蝶が不意に飛んだやうに。

「可恐い顔をして睨みはつた。それがな、路之助はんのおかみはんえ。」

「路之助？　……　路之助の　……」

「立女形、あの花形に、蝶蜂の群衆つた中には交らないで、ひとり、束髪の水際立つた、この、かげろふの姿ばかりは、獨り寢すると思つたのに　ーー　請ふ、自惚にも、出過ぎるにも、聽くことを許されよ。田舍武士は、でんぐり返つて、自分が、石段を熊の上へ轉げて落ちる思がした。

「何もな、何も知らんのえ、私路之助はんのは、あんたはん、ようお馴染の　ーー　源太はん、帶が弛む　ーー　いははつた妓どすの。それをば何やか

て、私にして疑やはつてな、疑やはるばかりやおへん、えらいこと怨みやはる。　……よつて、お客はんたちに分れて、一人で寝るとな　ーー　藍川館いうたら奥の奥は、鐵道線路に近うおすやろ。がツがツ響がして、よう寝られん、弱つて、弱つて、とろりすると、ぐウと、緊めて、胸倉とつて、ゆすぶらはる、　……　おかみはんどす。キヤアいうて、恥かし　……　長襦袢で遁げるとな、しらがまじりの髪散らかいて、般若の面して、目皿にして、出刃庖丁や、撞木やないのえ。　……　ふだん、はいからはんやよつて、どぎついナイフで追つかけはる。胸かて、手かて、揉み、悶えて、苦して、苦して、死ぬるか思ふと目が覺める　……　よつて、よう氣をつけて引結へ、引結へしておく伊達巻も何も、ずる／／に解けて了うて、たら／／冷い汗どすね、　……　前刻はな夢でなうて、なほおそろして、おそろして。」　それで、あの、階子段　ーー今度は大森彦七が踏みこたへた。

「神經だ、神經ですよ。」

誰でも此の場は知識になる。

「しかし、何うだか、その路之助一件は、事實な

のでせう。」
誰でも此の場は凡夫になる。
「つらいこと。」
と、斜にそむいて、
「あんたはんまで、そない言ははる、口惜いえ。」
「が、しかし、つらいでせう。」
莨を捨てて稍子盃を取つて、
「そんな時は、これに限る。熱燗をぐつと引つかけて、その勢ひで寝るんですな。ナイフの一挺なんざ、太神樂だ。小手しらべの一曲さ。さあ、一つ。」
「やどへ行て。」
「成程。」
「あんたはん、のましてくりやはりますか。」
「飲ませますとも。」
「嬉しいな、段で、抱いてくれやはつた時から、あんたはんは生命の親どす。」
眞顔で、恁うまでいはれたのには、酒が支へた。胸の澄まない事がいくらある……
「お言で痛み入る。」

と、もう一息ぐつと呷つて、

「ー　實は串戯だけれどもね、うつかり、人を信じて、生命の親などと思つては不可せん。人間は外面に出さないで、どういふ不了簡を持つてゐないとも限りません。

恁ういふ私ですがね、笑ひ事ぢやあるけれども、夢で般若が追廻すどころか、口で、といふと、大層口説でもうまさうだ。然うぢやない、心で、お絹さんを　・・・・・」

「私をえ？」

「幽靈にしましたよ。ご兔なさいよ。殺した事があるんだから。」

「あんたはんがな。」

前髪がふつくり搖れて　・・・・・　差俯向く。

「本望どすな。」

と莞爾して、急に上げた瓜横顔が、差向ひに輕く仰向いた、眉の和やかさを見た目には、擬寶珠が花の雲に乗り、霞がほんのりと縁を包んで、欄干が遠く見えてぼうとなつた。その霞に浮いて、たゞ御堂の白い中に、未開紅なる唇が夜露を含んで咲かうとする。・・・・・

「あれえ。」
聲を絞ると、擬寶珠の上に、圓髷が空ざまに振られつゝ、
「蛇が、蛇が。」
「何、蛇が。」
「赤い蛇が。」
赤い蛇は、褄の亂れた、きみの裾のほかにあるものか。
「膝が震へて、足が縮む　……　動けば落ちようし、どないしよう。」
と欄干に、わな／＼。
「今時蛇が、こんな處へ。　……　不忍の池には白いのがゐるといふが。」
と、故と落着いたが、足もとはうろつきながら、外套の袖で、背後状にお絹を圍つた。

「額の、額の。」
あゝ、幽に見ゆる觀世音の額の金色と、中を劃つて、霞の疊まる、横廣い一面の額の隙間から、一條たらりと下つてゐた。
「紐だ、紐ですよ。何かの。」

勇を示して、示し次手に、ぐい、と引くと、

「あれ、……白い顔。」

聲とともに、くなりと膝をついたお絹が、背後から腰につかまつた。

「上から覗かはる　……　どうしようねえ。」

お聞きづらからうが、さういつた意味で、身震ひをする勢ひが手傳つて、紐に、ずる／＼と力が入ると、ざ、ざ、ざ、と摺れて、この場合　ー　ごみも埃もいつては居られぬ。額の裏から、ばさりと肘に乗つたのは、菅笠です。鳩の羽より輕かつたが、驚くはずみの足踏に、ずんと響いて、どろ／＼と縁が鳴ると、取縋つた手を、アツと離して、お絹は、板に手をついて、眞俯向けになりました。

おでんの膳なぞ一跨ぎに、今度は私の方が欄干へ乗出して、外套を拂つた。かすりの羽織の左の袖で、其の笠の塵を拂つたんです。一目見ると分つたのです。女の蒼白く見えたのは、繪の具です。彩色なんです。而して、笠に描いたのは、　……　朝顔

ー　ー

「朝顔（あさがほ）？」

五

こゝに寫し取る今は知らず。境の話を聞くうちは、おでん爛酒にも醉心地に、前中、何となく櫻が咲いて、花に包まれたやうな氣がしてゐたのに、桃とも、柳ともいはず、藤、山吹、杜若でもなしに、いきなり朝顔が、しかも菅笠に、夜露に咲いたので、聞く方で、ヒヤリとした。この篇の著者は、其處で、境に聞反したのでいあつた。

「朝顔？」

と。

六

「ーー　その時から、やがて八九年前になります　ーー　山つゞきといつても可い　ーー　鶯谷にも縁のありますところに、大野木元房といふ、歌人で、また繪師さんがありまして、大野木夫人、元戻の細君は、私の女友だち　……　友だちといふよりおなじ先生についた、いはば同門の弟子兄妹……」

恁う話しかけた、境辻三の先師は、故と大切な名を祕さう。人の知つた、大作家、文界の巨匠である。

……　で、この歌人さんとは、一年前、結婚をしたのでしたが、お媒酌人も、私どもの　ーー　先生です。前から、その縁はあるのですけれども、他家のお孃さん、毎々往來をしたといふ中ではありません。

清瀬洲美さんといふんです。

女學校出だが、下町娘。父親は、相場、錢山など

に引かゝつて、大分不景氣だつたやうですが、もと大藏省邊に、いゝ處を勤めた、退職のお役人で、お孃さん育ちだから、品がよく一寸權高なくらゐ。尤も、十八九はたちごろから、時々見た顔ですから、男弟子に向つては、澄ましてゐたのかも知れません。薄手で寂しい、眉の凛とした瓜核顔の　　佳い標致。

申すのを忘れますまい。　　……　さしあたり、……　のちの祇園のお絹を東京にしたやうな人だつたんです　ーー　いや、何うも、若氣の過失、やがての後悔、正面あなたと向ひ合つては、慙愧のいたりなんですが、私ばかりではありません。そのころの血氣な徒は、素人も、堅氣、令孃ごときは。……　へん、地者、と稱へた。何だ、地ものか。

「藥でも、とろゝはあやまる。　　……　誰もご馳走をしもせぬのに。たふとい處女を自然薯扱ひ。蓼酢で松魚だ、身が買へなけりや鹽で揉んで蓼だけ噛れ、と惡い蟲めら。川柳にも、（地女を振りも返らぬ一盛）そいつは金子を使つたでせうが、此方は

素寒貧で志を女郎に立てて、投げられようが、振られようが、赭熊と取組む山童の勢ひですから、少々〳〵薄いのが難だけれど　ーー　すなほな髪を、文金で、打上つた、妹弟子如きものは、眼中になかつたのです。

お洲美さんが、大野木に縁づいたのは二十二の春　ーー　彌生ごろだつたと思ひます。その夏、土用あけの殘暑の砌、朝顔に人出の盛んな頃、入谷が近いから招待されて、先生も供で、野郎連中六人ばかわ、大野木の二階で、蜆汁、冷豆府どころで朝振舞がありました。新夫人　・・・・・　はまだ島田で、實家の父が酒飲みですから、ほどのいゝ爛がついてゐるのに、暑さに咽喉の乾いた處息つぎとはいつても、生意氣な、冷酒を茶碗で煽つて、忽ちふら／＼ものになつて、あてられ氣味、頭を抱へて蒼くなつた處を、ぷしつけものと、人前の用捨はない、先生に大目玉をくらつて、上げる顔もなかつた處を、「ほんの一口とおいひなさいましたものを、私がうつかりもり過ぎて」と妹分の優しい取なし。それさへ胸先に沁みましたのに、「あちらでおやすみなさいま

し。」　……　次ぎの室へ座を立たせて　ーー
其處が女作家の書齋でしたが。

蚊がゐますわ、と團扇で拂つて、丸窓を開けて風を通して、机の前の錦紗のを、背に敷かせ、默つて枕にさせてくれたのが。　……

今更贔屓分でいふのではありません、　ーー
ちよツ、目力（助）編輯め、女の徳だ、などと蔭で皆憤懣はしたものの、私たちより、一歩さきに文名を馳せた才媛です、その文金の高髷の時代から
……

平打の簪で、筆を取る。　……
銀杏返し、襟つきの縞八丈、黒締子の引かけ帶で、（＞たけくらべ）を書くやうな婦人も、一人ぐらゐ欲しいとは、お思ひになりませんか、お互ひに　……

月夜の水にも花は咲く。　……　温室のドレスで、エロのにほひを散らさなければ、文章が書けな

いといふ法はない。

ーー　話は一寸それました。が、さあ、前後しました。後一年、不斷、不沙汰ばかり、といふうちにも、ーー　大野木宗匠は、……　常袴の紺足袋で、炎天にも日和下駄を穿つ。……　何故といふに、男は肝より丈まさり、應封をするのにも、見上げるのと、見下ろすのでは、見識が違ふ。……　その用意で、その癖ひよろりと脊が高い。ねば／＼と優しい聲を、舌で捏ねて、ねツつりと齒をすかす、言のあとさきは、咽喉の奥の方で、おゝんと、空咳をせくのをきつかけに、指を二本鼻の下へ當てるのです。これは可笑しい。が、みつくちといふんぢやありませんが、上唇の眞中が、一寸齒莖を覗かせて反つてゐるのを隱すためです。言語、容體、蟲が好かなくつて大嫌ひ。尤もそれでなくつても、上野の山下かけて車坂を過ぐる時ンば、三島神社を右へ曲るのが、赤蜻蛉と齊しく本能の天使の翼である。根岸へ入つては自然に背く、といふ哲人であつたんですから、つい近間へも寄らずに居ました。

郷里　ーー　秋田から微祿した織物屋の息子ですが、何う間違へたか、弟子になりたい決心で上京して、私を便つて、斷つて大野木宗匠を師に仰ぎたい、素願を貰かして貰ひたい、是非、といふ頼みです。

頼まれた。　……　頼まれたものは仕方がない。しかも、なくなつた私の父か此の織物屋に世話になつた義理がある　……　先生の内意も伺つた上……　其處で大野木をたづねたのですが、九月末、もう、朝夕は身にしみますのに、羽織は衣がへの時から　……　質です。

ゆかた一枚、それも織つたんぢやありません、北國人の鎧ですから、ものほしさうな瓦斯織の染縞で、安もの買の汗がにほふ。

こいつを、二階の十疊の廣間に引見した大人は、風通小紋の單衣に、白の肌襦袢、少々〳〵汚れ目が黄ばんだ……兄妹分の新夫人、お洲美さんの手が届かないやうで、惡いけれども、新郎、膏が多いとお心得下さいまし。　ーー　綾織の帶で、鹽瀬紺無地の

袴。總のついた、塗柄の團扇を手まさぐる、と、これが内にゐる扮装で、容體が分りませう。

鼻の下へ、例の、指を立てて、「おゝん」と飲み込んでくれました。「不思議な縁ですね、まだ下極りで、世間に發表はしないけれども、今度、仙臺の　ーー　一學校の名譽教授の内命を受けて、あと二月ぐらゐで任に赴く。　ーー　ま、その事になりました。丁ど幸ひ、内弟子、書生にして連れて行かう、宜しくば。」　……　も何もない。願ったり叶ったり、話は思ふ壺へはまつたのですが。

ーー　となりの、あの、小座敷で、あの、朝顔の、あの朝ーー

手細工らしい桔梗の肘つきをのせて、繪入雜誌を幾册か、重ねて、それを枕にさして、默つて顔を見ると、ついた膝をひいて立ちしなに　「憎らしい。」

……　たゞ、その雜誌一册ものなぞ、どれも皆ーー　ろくなものではありませんが、私のかいたのが入つてゐたのを、後姿と一所に、半ば起きに、密と見た時、なぜか、冷酒が氷になつて、目から、

しかも、熱いものがほろ／＼と湧きました。

時に、その人がいま出て來ません。その癖、訪れた玄關では、女中よりさきに、出迎へて、二階へ通してくれたのに、　ー　茶を運んだのも女中です。

庭で蟋蟀の鳴くのが聞える。

「蔦の葉の浴衣に、薄藍と鶯茶の、たて縞お召の袷羽織が、しつとりと身たけに添つて、紐はつつましく結んでゐながら、撫肩を弱く辷つた藤色の裏に、上品な氣が見えて、緋色無地の背負上が媚かしい。おゝ、紫手絡の圓髷だ。透通るやうな、その薄化粧。

金銀では買へないな。二十三か、あゝ、おいらは五になる。作者夥間の、しかも兄哥が、このしみつたれぢやあ、あの亭主に嘸ぞ肩身が狭からう、と三和土へ入ると、根岸の日蔭は、はや薄寒く、見通しの庭に薄が靡いて、秋の雲の白いのが、ちら／＼と、青く澄んだ空と一所に、お洲美さんの頸に映つた。

目の前にあるその姿が、二階へは來ないのです。御厚意は何とも。しかし内弟子に住込ませるとまでおつしやつて下さいますと、一度（何といはう……ー　女史。）女史に御相談の上でありませんと如何でせうか。　「おゝん」　と咳して、　「處がね、それが妙ですよ、不思議です。　ー　妻がね、今朝です　ー＜　＞今日は境さんが見えさうな氣がする、といふのです。つひぞ、おいでになりもせぬのに、そんなことが、といひますとね、手をお出しなさい、手の筋を見てあげませう。あなたの今日の運命にも顯はれるから。　ー　然ういふのでね、手を見せました。　……　妻に、あんなかくし藝があるとは知りませんでしたよ。妻が豫知して、これが當つて、門生志願が秋田の産、僕の赴任が仙臺といふ、かう揃つたのに、何の故障がありますか。　……　お庇でね、おゝん、お庇もをかしいですが、手の筋で、妻と握合ひました。　……境さん、變な話ですが、お互ひに、藝術家は情熱を以て生命として活きるのですな。妻もご同門ではあり、藝術家です、どんなに、その愛情が灼熱的であらうか、と期待しましたのに、　……　何うも

冷たい。如何にも冷やかですが、稟性の然らしむる處ですかな。或は、あなた方、先生の教へは、藝に熱して、男女間は淡泊、その濃密膠着でなく、あつさりといふ方針ででもおあんなさるか、一度内々で、と思つた折でもありますのでして。　……」

失禮します。　……　居堪らなくて、座を立つと、ーー　「散歩をしませう。上野へでも、秋の夕景色はまた格別ですよ。」　此方はひけすぎの廊下鳶だ。　ーー　森の夕鴉などは性に合はない。

「あの、いま、さういはうと思つてゐた處です。なんにもありませんが、晩のご飯を。」

まだ入れかへない葦戸に立つて、夫人がほの白く、寂しさうに薄暮合を、たゞ藤紫で染めてゐた。

その背の、奥八疊は、繪の具皿、筆おき、刷毛、毛氈の類で殆ど一杯。で、茶の間らしい、中の間の眞中に、卓子臺を据ゑて、いま、まだ燒海苔の皿ばかり。

三巴に並んだ座蒲固を見ると、私は玄關へ立ち切

れなかつた。

「すぐお燗がつきますが。境さん、さきへ冷酒ですか。」

「いや、斷ものです。」

と眞中へよれ／＼の袖口を、そつとのばして、坐ると、どうも、其方が上席らしい、奥座敷の方へお洲美さん。負けてはゐないな、妹よ、何だか胸が熱くなる。紺の袴は、入口の茶棚傍を勢ひ然るやうに及んで、着席です。

「牛が宜しい　……　書生流に、おゝん。」

亭主のすきな赤烏帽子を指揮する處へ、つくだ煮を裝分けた小皿に添へて、女中が銚子を運んで來た。

「よく、いすいだかい。」

「綺麗なお銚子。」

色繪の萩の薄彩色、今寓里が露に濡れてゐる。

「妻の婚禮道具ですがね、里の父が飲酒家だからですかな。僕は一滴もいけますまい、妻はのまず。

……　おゝん、あの、朝顔以來、内でこれの出たのは然うですなあ、大掃除の時、出入りの車夫に

振舞うたばかりですよ。」
「お毒見をいたします。」
お洲美さんが白い手で猪口を取つた。
「注いで下さい。」
大人驚いた顔をして、
「飲むのかね。」
「大掃除の時の車夫のお銚子ですから。　ーー
この方は、あの、雪助も同然の身持だけれど　……
先生の可愛い弟子です。」
かねて、切れた眦が吃として、
「間違ひがあると、私が、先生に申譯がありません。」
「おゝん、何か、私の饒舌つた意味を取違へてゐるやうだけれど、いゝさ、珍らしく飲むのも可からう　……　注ぐよ。」
「なみ／／と。もう一つ。もつと、もう一度。」
齒ぎしみするやうに、きツきツと。
「あゝ、飲んだ。」　と、もう白澄んだ瞼を染めた。
「境さん、いゝでせう、上げますわ。」
「駕籠屋は建場を急いでゐます、早く飲まうと思

ってね。」

「おいらんのやうにはいきません。お酌は不束ですよ、許して下さい。」

「此方も驅けつけ三杯と、ごめんを被れ。雲雪足早き雨空の、おもひがけない、ご馳走ですな。」

と、夫人と見合つた目を庭へ外らす。

大人の頤が上つて、

「大分壮になりましたな、おゝん。」

「あなた、電燈を捻つて下さい。」

牛肉もふつ／＼煮えて來た。

といふうちにも、何ういふものか、皿に擴げた、一側ならべの肉が、鍋へ入ると、じわ／＼と鳴ると齊しく、箸とともに眞中でぢゆうと消え失せる。注すあと、注すあと、割醤油はもう空で、葱がじり／＼焦げつくのに、白瀧は水氣を去らず、生豆府が堤防を築き、渠なつて湯至るの觀がある。

「これぢや、牛鍋の湯豆府ですのね。」

ふうと、お洲美さんの鼻のつまつた時は、お銚子がやがて四五本目で、それ湯を、それ焦げる、それ

湯を、さあ湯だ、と指揮と働きを亭主が一所で、鐵瓶が空のあとで、水指が空になり、湯沸が俯向けになつて、なほ足らず大人、居丈高に伸び上つて、臺所に向ひ、手を敲いて、これよ、水ぢや、水ぢや。」

七

が、妹分のために、苦にせまい。肉の薄いのは身代の痩せたのではない。大人は評判の蓄財家で、勤倹の徳は、範を近代に垂るゝといつても可いのですから。

その證據には、水騒ぎの最中へ、某雑誌記者、氣忙しさうで口早な痩せた男の訪問があり、玄關で押問答の上、二階へ連れて上つたのは　……　挿畫何枚かの居催促、大人に取つては、地位轉換、面目一新といふ、某省の辭令をうけて、區々たる挿畫如きは顧みなかつたため債が迫つた。顧みないにした處で、受合つた義理は義理で、退引ならず二階で、膝詰の揮毫となる處へ、かさねて、某新聞の記者、此方は月曜附録とかいふ歌の選の督促で一足後れたが、おくれただけ、なほ怒つたやうに、階子段を、洋袴の割股で押上つた。この肥つたので、二階へ蓋をしたやうに見えました。

「流行るんだなあ。」

編輯、受附、出版屋、相ともに持込むばかりで、催促どころか、めつたに訪問などされた事のない、兄弟子は、夜風を構外頬へ、げつそりと腹を空かして、

「結構ですな。」

枯野へ霜がおりたやうな、豆府の土手の冷たいのに、押取つて、箸を向けると、

「およしなさい。」

と醉とともに、ふら／＼とかぶりを振つて、

「牛鍋の湯豆府なんか、私の御馳走ではないのですから。　……　あなたのお頼みなさいました、そのお弟子さんですがね、内へおいでなさるんなら、この覺悟、ね、より以上かも知れませんから。お葱や、豆府はまだしも、　……　絲蒟蒻だと思つて下さいましね。お腹が冷たくなるんですから　……　お酒はあります。あ、私にも飲まして頂戴もう一杯もつとさ。」

「いや驚いた、いけますなあ。」

「一生に一度ですもの。」

「え。」

「いゝえ、二度です、婚禮の晩、飲みましたの。

醉ひましたわ。」
「亂暴だなあ。しかし、痛快だ。お酌をするのも頂くのも、ともに光榮です。」
「お兄上。」
「・・・・・・・・」

「おぼ、ほ。あゝ醉つた。私・・・・・お兄上にあたる方にお酌がさして罰が當る。・・・・・前に、あなたが、まだ、先生のお玄關にいらつしやる時分、私が時々うかゞふ毎に、駒下駄を直さして、あゝ、勿體ない、然う思ふ、思ふ心は、口へは出ず、手も足も固くなるから、突張つて、ツン／＼して、嘸ぞ高慢に見えたでせう。髪の毛一筋拔けたつて、女は生命にかゝはります。置きどころもない身體を、あなたの目に曝すんですもの、形も態もありはしません。文學少女とかいふものだつて、鬼神に横道なしですよ。自分で卑下する心から、氣がひがんで、あなたの顔が憎らしかつた。あなたも私が憎いのね。
ーー　あゝ、信や（女中）二階で手が鳴る。　ーー蟲が煩い。この燈を橋して、隣室のを點けておくれな。」

その間、頸脚が白かつた。振仰向くと、吻と息して、肩が搖れた、片手づきに膝をくねつて、

「あゝ、醉つて來た、境さん、……おいらんとは。お陸じい？……」

と、バタリと疊へ手をつくと、浴衣の蔦は野分する。

「何をいつてるんです。」

「おいらんは何て方？　……　十六夜さん、三千歳さん？」

「薄雲、高尾でございます。これでも其處らで、鮨を撮んで、笹卷の笹だけ袂へ入れて振込めば、立ちどころに仙臺樣。　ーー　庭の薄に風が當る。……

ーー　寂しいな、お洲美さん、急に何だか寂しい氣がする、仙臺へ行つてしまはれては。」

「ですけどね、あの、ほかの世話はかまひませんけど、媒妁だけは、もう止してね。」

と、眉が迫つて見据ゑるのです。

「媒妁？」

「ーー　名はいひますまい、賣ツ子ですよ。私

たちのお弟子なかまではありません。別派、學校惻の花形で、あなたのお友だちの方に　ーー　わかりまして　……　私を、私をよ、嫁に、妻に世話しようとなすつたのは誰方でした。」

「そ、それは、しかし、勿論、となすつたのは誰方でした。」≫ ―何だ。別派、學校の　……　可。……　その男が、私を通じて、先生まで申出てくれと頼まれたものだから　……」

「お料理屋へ私をお呼び下すつて　……　先生が、そのお話を遊ばしたんです。　ーー　境が橋わたしの口を、口を利いた、と一言　……　一言おつしやるのを聞いた時、私、私　……」

「お待ちなさい、待ちたまへ。　ーー　だから斷つたから差支へないでせう。」

「えゝ、斷りましたわ、誰があんな　ーー　あんな男に世話しようなんのつて、私、あなたが、私あなたが。」

「そりや無理だ、そりや無理だ、お洲美さん、あなたが、あの男を好きだか、嫌ひだか、私がそれを知るもんですか。」

「だつて、だつて、些とでも、私を、私を思つて下すつたら、怪我にもあんな、あんな奴に。」

「無理だ、そりや亂暴だ。」

「えゝ、無理です、亂暴です。だから、私、すぐそのあとで、それまで人をかへ、手をかへ、話があるのを斷つてゐた　ーー　よござんすか　ーー　私も、あなたが大嫌ひな、一番嫌ひな、何より好かない、此家へ縁付いて了つたんです。ほ、ほ、ほ。」

＃＃＃＃＃＃＃＃

太白の絲を噛んだやうに、白く笑つて、

「亂暴でせう。亂暴、亂暴だけど、あの一番嫌ひな人を世話しようとした、その口惜さに、世話しようとした人の、あなたですよ、あなたの一番嫌ひな男の許へ縁についた。無理です、亂暴です。亂暴ですけど、あなたは、あなただつて、そのくらゐな著作をなさるぢやありませんか。」

「何にもいはない。　ーー　もう、朝顔の、ま、枕が時から、一言もないのです。私は坊主にでもなりたい。」

お洲美さんは、〓つてゐた目を閉ぢました。そして、うなづくやうに俯向いた耳許が石榴の花のやうに見えた。

「私は巡禮　……

もうこの間から、とりあへず仙臺まででも、奥州を巡禮してゆきたい氣がするんです。まつたくですわ。さういつたら、内の女中ツたら、ねえ、あの、私のやうな汚がり屋さんが、はゞかりを何うするつて笑ふんですの。巡禮といへば、いづれ木賃宿でせう、野宿にしたつて、それは困るわね。でも、眞面目ですよ、ご覽なさい　ーー　昨日も上野の淨明院石占守の萬體地藏様に、お參りをして、五百體、六百體と、半日、日の暮方まで巡りましたらね、（水木藻蝶。）いゝ名でせう、踊のお師匠さんに違ひないのです。（行年二十七）として、名を刻んだ地藏様が一體、菅笠を　ーー　あゝ、暑い、私何だか目が霞む。　ーー　菅笠を。　……　めしてしいらつしやるんなら、雨なり、露なり、取るのは遠慮だつたんですけど、背中に掛けておいでなすつたもんだから、外して、本堂へ持つて行つて、お布施をし

て、坊さんに授けて貰つて來たんです。　ーー　これだつて女です、巡禮しても、些とでも、形のいゝやうに、お師匠さんのを　ーー　あの、境さん、菅笠を抱きました時に、何となく、今日ね、あなたがいらつしやる氣がしたんですよ　ーー　そ、それに二十七だとすると、もう五年生きられますもの。

ーー　押入なんかに藏つておくより、晝間は一寸秋草に預けて、花野をあるく姿を見ようと思ひますとね、萩も薄も寢てしまふ、紫苑は弱し。　……

さつき、あなたのおいでなすつた時ですよ、丁ど鷄頭の上へ乘つけて見ましたの。さうすると、それがいゝ工合に。」

あゝ、然うか、鷄頭か。春日燈籠をつゝんで、薄の穂が白く燈に映る。その奥の暗い葉蔭に、何やら笠を被つた黒いものが立つて居て、ひよろ／＼と動くのが、ふと目に着いてから氣にかゝつた。が、決意もなく、斷行もない、坊主になりたいを口にするとともに、何うやら、破衣のその袖が、ふら／＼と誘ひに來さうで不氣味だつた。

「見せますわ、見せませうね。巡禮を。」
「大賛成成です。」
「水木藻蝶さん、うつくしい人の面影ですよ。」
何處で脱いだか、はツと忽ち、うす鼠地に蔦を染めた、女作家の、庭の朧の立姿は、羽織を捨てて、鶏頭の竹に添つて居た。

輕くはづして、今、手提に引返す。帶が、もう弛んで居る。さみしい好みの水淺葱の縮緬に、蘆の葉をあしらつて、淡黄の肉色に影を見せ、螢の首筋を、ちら／＼と紅く染めた蹴出しの色が、雨をさそふか、葉裏を冷く、颯と通る處女風に、蘆も螢も薄〈すゝき〉に映つて、露ながら白い素足。二階の裏窓から漏れる電燈に、片頬を片袖ぐるみ笠を黒髪に翳して、隠すやうにしたが、蓮葉に沓脱をひらりと、縁へ。

「ふら／＼する。一寸歩行くと、ふら／＼しますわ。醉つ了つて。」
と、元の座にくづれた。
「あゝ私、何だか分らない。」

ふう、と仰向けに胸の息づかひ、乳の蔦がくれの膨みを、犇と菅笠で壓へながら、

「巡禮に御報謝……ね。」

と、切なさうに微笑んだ。

電燈を背後にして、襟のうすぐらい、胸のその菅笠が、ほんのりと、朧に白い。

「や、お洲美さん、失禮ですが、隱して下さい、笠を透して胸が白い、乳か映る。」

「見えますか。」

「申すも愕りだが、袖で隱して。」

「いゝえ、いゝえ。」

おくれ毛が邪慳に搖れると、頬が痩せるやうに見えながら、

「嬉しい、胸が見えるんです。さ、遮るものなしに通つた、心の記念に、見える胸を、笠を通して捺塗つて見て下さい。その幻の消えないうちに。色が白いか何ぞのやうに、胡粉とはいひませんから、墨ででも、澁ででも。」

「雪が一掴みあればいゝと思ふ。」

「信や……繪の具皿を引攫つておいで。」
「穏かでない、穏かでない、攫ふは亂暴だ、私が借りる。」

胡粉に筆洗を注いだのですが。
「畫工でないのが口惜いな。」
「……何ですか蘭竹なんぞ。あなたの目は徹りました、女の乳といふものだけでも、これから、屹と立派な文章にかけるんです。」
ー　以來、乳とかく時は一字だけも胡粉がいゝ！
と咄嗟に思つて、手首に重く、脈にこたへて、筆で染めると、解けた胡粉は、ほんのりと、笠よりも掌に響き、雪を圓く、暖かく、肌理滑らかに裝上る。色の白さが夜の陽炎。

「あゝ、あゝ、刺青ツて、こんなでせうか。」
居ずまひの亂るゝ膚に、紅の點滴は、血でない、螢の首でした。が、筆は我ながら刀より鋭く、双の乳房を、驚破切落したやうに、立ててゐた片膝なり、思はず、〓と尻もちを支いた。

お洲美さんは、うつとり目を開き、膝を辷つて、蹴出しを隠した菅笠に、兩の白いものを視て、擽つたさうに、そツと撫でて、

「……熱いわ　ーー　この乳も醉つてゐる……」

と、いつて寂しく微笑んだ。

「人目があります。これでは巡禮して、肌を曝しては、あるかれませんね。ぼつちり薄紅を引きませうか、……まあ、それだと、乳首に見えようも知れません。」

淺葱の繪の具を取つて、線を入れた。白雪の乳房に青い靜脈は畝らないで、うすく輪取つて、双の大輪の朝顔が、面影を、ぱつと咲いた。

蔓を引いて、葉を添へた。

「うまいなあ、大野木夫人。」

「知らない。　ーー　このくらゐな繪は學校で習ひます。同行二人ーーあとは、あなた書いて下さいな。」

「御意のまゝです、畏まつた。」

「薄墨だし……字は餘りうまくないのね。」・
「弘法様ぢやあるまいし、巡禮の笠に、名筆が要りますか。」
「頂くわ、頂きますわ。」
と、被らうとする。
「お、お待ち下さい。　ー　二階が餘り靜です。氣障をいふやうだが　……　その上になほ、お髪が亂れる。」
「可厭な、そんな事は、おいらんに。」
「あゝ、坊主になります。」
首を縮めた。

「丁どいゝ、坊主が被つて見せませう。」
唯、魔がさしたやうに、否、佛が導くやうに、笠を被ると、笠の下で、笠を被つた、笠の男が、笠を被つて、ひとりでに、ぷら／＼と歩行き出したのです。

中の室から、玄關へ、式臺へ、土間へ、格子へ。
ハツと思はず氣が着いたが、
「お洲美さん、貰つて行きます。」

我知らず聲が出ました。

「あれ、奥様。」

女中が飛出す。

お洲美さんは、式臺に一段躓きながら、褄を投げて、障子の桟に縋つたのでした。

ぷつ／＼と、我とも分かず、口の裡で、何とも知らず、覺えただけの經文を呟き呟き、鶯谷から、上野の山中を彷徨つて歩行いた果が、夜ふけに、清水の舞臺に上つた。而して、朱の扉の端に片よせて、紅緒をわがね、なし得る布施を包んだ手帖の引きほぐしに、

大慈のお　ん心にまかせ三界迷離の笠一書

よしなにおん計　ひのほど奉願上候

……夜　巡禮者

當御堂　お執事中

禮拝

舞臺を下りると、いつか緒の解けたのが、血のやうに絡はつて、生首を切つて來たやうに見えます。

秋雨がざつと降つて來る。　……　震へ、震へ、段を戻つて、もう一度卷込んで、それから、ひた走りに、駆出しましたが。

お洲夫さんは　ーー　水木藻蝶の年も待たず、三年めに、産後で儚くなりました。

「その紅緒なんです。其の朝顔の笠、其の面影なんです。！」

八

「ーーお絹さん、宿へ行つて話しませう。　ーー此の笠に、深いわけがあるんですから。」

「そしたら、泊つておくれやすえ、可恐いよつて。」

「大きに。」

お洲美さんの思出のために、目の前の誘惑に對する餘裕が出來て、と、輕く受けて、　……　我ながら一寸男振を上げながら、夜露も身に沁む、袖で笠を抱きました。

「旦那、歸つてもいゝんでござんせう。」

藍川館の玄關へ引込んだ時、醉つた車夫がニヤ／＼と聲を掛けた。

「ほんに。」

「いや、一臺は、そのまゝ。幌は掛けたまゝ頼むよ。」

笠を預けて出たんです。が、今おもつても、冷汗が流れます。此の俥をかへしてゐたら、何の面目が

あつて、世にお目に掛かられよう。

見て下さい。　ーー　曲りくねつた長い廊下を、さうでせう、すぐ外は線路だといふ、奥の奥座敷へ通つて、殆ど秘密室とも思はれる。中は廣いのに、たゞ狭い一枚襖を開けると、何うです。歡喜天の厨子かと思ふ、綾錦を積んだ堆い夜具に、ふつくりと埋まつて、暖かさに乗出して、仰向けに寝て居たのが、

「やあ。」

といふ。

枕が二つ。……

「これはおいでなさい。」

眉の青い路之肋か、八反の廣袖に、桃色の伊達巻で、むくりと起きて出たんですから。

「遅いので、何のおもてなしも。……さ、さ、蜜柑でも。」

片寄せた長火鉢の横で、蜜柑の皮。筋を除る、懐紙の薄いのが、しかし、蜘蛛の巣のやうに見えた。

「ーーさうですか、いづれ明日。ーーお供を……」

「いや、待たせてあります。」

路之助は、式臺に、色白くその伊達巻で立つた。

お絹が廂を出て、俥の輪に摺り寄つた處を、

「握手をしますよ。」

半身を幌から覗くいと、

「は、は、は、何うぞ確乎。」

「さやうなら。」

「お靜かに。」

「あゝ、お洲美さん。」

萬一、前刻に御堂の縁で、脣を寄せたらば、恥辱に活きてはゐられまい。ーー

「お洲美さん、全く、お庇だ。お洲美さん。」

「旦那、何うか、なさいま七たか、旦那。」

「うむ。」

踏切の坂を引あげて、寛永寺横手の暗夜に、石燈籠に圍まれつゝ、轍が落葉に軋んだ時、車夫が振向いた。

「婦の友だちだよ。」

「旦那。」
車夫は、藍川館まで附絡つた、美しいのに遁げられた、色情狂だと思つたらう。……
「うつくしい、儚い人だよ。私の傍に居るやうだ。」
「ぎやあ。」
「次手におろしておくれ、山の中を巡禮がしたくなつた。」
「降り出しましたぜ、旦那。」
「野宿をするのに、雨なんぞ。……あなたは濡らさない、お洲美さん。」
「わあ、大きな燈籠の中に青い顔が、ぎやあ。」
俥を棄てた。

術を似て對すれば、俳優何するものぞ。たゞしその頃は、私に臺本、戯曲を綴る氣があつた。ふと、演出にあたつて、劇中の立女形に扮するものを、路之助として、技の意見、相背き、相衝いて反する時、「ふん、おれの情婦ともしらないで。……何、人情がわかるものか。」と侮蔑されたら何とする？

……

「あゝ、お洲美さん、ありがたう。」

と朝顔の笠を兩袖で　ー　外套は宿へ忘れて來た　ー　袖で犇と抱いて、櫻を誘ふ雨ながら、ざつと一しきり降り來る中に、怪しき巨人に襲はるゝ、森の恐怖にふるへつゝも、さめ／＼と涙を流した、石燈籠が泣くやうに。……

【完】